



生まれたばかりの赤ちゃんが赤いのはなぜ

赤ちゃんが赤いのは、血管がすけて見えるため

赤ちゃんは、子どもや大人の人よりも、赤い皮ふをしています。

特に、生まれたばかりのときは真っ赤です。また、きげんのいいときには白くても、いちど泣きだすと、体じゅうが真っ赤になりますし、おふる上がりのときに真っ赤です。

大人の人の中にも、赤い部分があります。くちびるや口の中、舌やまぶたの裏などです。これらの部分は、体のほかの部分の皮ふよりも、うすかったり、とう明に近かったりします。そのため、皮ふの下を通っている血管がすけて見えるので赤いのです。

赤ちゃんのはだが、赤く見えるのも理由は同じです。お母さんのおなかの中で、守られて育ってきた赤ちゃんのはだの皮ふは、子どもや大人の人よりもうすく、そのため、皮ふの下を通っている血管が、すけて見えるため赤いのです。

しかし、真っ赤だった赤ちゃんのはだも、日がたつにつれて、太陽の光を浴びたり、寒い北風にあたったりしているうちに、子どもや大人の人たちのようなはだに、なっていくのです。

皮ふの役目とつくりは

人間の体の皮ふは、体を守る、体温を保つ、いろいろなものを感じるといった、三つのはたらきをしており、体のガードマンの役目をしています。また、皮ふは、表皮・真皮・皮下組織の3層になっており、血管や神経がきているのは、表皮の下の真皮の部分なので、ここを切ったり、けがなどをすると、血が出るのです。（監修・保志 宏）

